

松浦奈々／咲くやこの花インタビューvol.23

松浦奈々(まつうら・なな)【令和元年度 音楽部門[ヴァイオリン]】



自然と人の心を開かせるおらかな空気感、話すたびにコロコロ変わる表情も楽しい。関西を代表する楽団のひとつ、日本センチュリー交響楽団でコンサートマスターを務める松浦奈々さん。旺盛な好奇心と豊かな感性は、ファッションや料理好きの一面からも垣間見えます。出身の和歌山から桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学を首席で卒業。ソロ活動にも積極的な注目のヴァイオリニストです。2019年は全3回の演奏会で、初挑戦となるベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全10曲を演奏し好評を博しました。多彩な色調でクラシックファンからの支持も厚い彼女にインタビュー。音楽家としての道のりや、2年前に出会った“師匠”との神秘的なエピソードまで、ざっくばらんに語ってくれました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「じつは小学生時代に1年間、ヴァイオリンを離れました」

咲くやの受賞は、楽団長さんからのメールで知ったそうですね。

そうなんです。業務メールと思って読んだので、最初は「え？」と驚きました。文面に「受賞されますか、辞退されますか」とあったので、「いただけるのならばひに！」とお返事しました(笑)。過去の受賞者に同じセンチュリーで同期だったホルンの木川博史君がいたので、賞の存在は知っていました。私もいただけるん

だ、嬉しいなと。贈呈式では色んなジャンルの方と同じ舞台に立つことが新鮮で、会場を出てからも「初めて聴きましたが、良かったです」と声を掛けてくださる方もたくさんいて嬉しかったです。



贈呈式のインタビューでは「習い始めたのが7歳と遅くて」とお話されていました。

だいたい3、4歳の幼稚園ぐらいから始める人が多いですね。私は近所のお友だちの男の子がいつも習い事でヴァイオリンケースのケースを背負っているのが羨ましくて。音を聞く前に、その姿に憧れました（笑）。

音楽へのご興味は、幼い頃から？

ピアノは小さい頃からずっと習っていました。もともと母親が音楽好きで、ヤマハの音楽教室で教えたり、その後は自宅でピアノ教室を開いていました。私が「ヴァイオリンの方が断然格好いい！」となってからは1年ぐらいお願いして、やっと習わしてもらいました。

実際に練習してみてもいかがでしたか。

最初は見よう見まねでやって怒られました。好きで始めたから、練習の仕方にも文句は言えなくて。小学校時代は、わりと厳しい先生に教わったので、そこで基礎体力が付いた部分はあったと思います。練習することが当たり前になるというか。何時間もの練習がサイクルになっていました。



くじけそうになったことは？

もちろん、あります(笑)。じつは小学生時代に1年間だけヴァイオリンを離れました。あまりにも練習が厳しくて。でも6年生くらいの時に、長原幸太君から「良い先生がいるよ」と紹介されて。工藤千博先生という恩師に出会い、変わりました。先生はご自身で「ヴァイオリンの小児科医」と仰っていたほど、子供たちに教えるのが本当に上手でした。周りの生徒さんたちも優秀な人たちばかり。神尾真由子ちゃん、木嶋真優ちゃんなど、上手な人に囲まれて私も自然と頑張ろうと思えたし、押し上げて頂きました。環境による影響は大きいと思います。工藤先生のレッスンが素晴らしかったので、またヴァイオリンを弾くことができました。

やはり周りのお友だちよりは、忙しい小学生でしたか？

そうですね。友達と遊ぶ時間はあまり無かったです。今考えると、もう少し友達と過ごす時間があれば良かったかなと。いざ自分が先生として教える立場になってみると、そう思います。ヴァイオリンばかりしている生徒には、「もっと学校の友達とも遊んでいいんだよ」と言っています。人として成長するためには、他者とのコミュニケーションが大事ですし、ヴァイオリンだけだと世界が狭くなっちゃうので。

松浦さんはその後地元を離れ、桐朋女子高等学校音楽科へ進学されます。

中学生以降は、ヴァイオリンを辞めたいと思ったことはないですね。ヴァイオリンでいこうと将来を決めたのもこの頃。高校は工藤先生が桐朋学園のご出身だったこともあり、東京への進学を勧めて頂きました。私もやるんだったらちゃんと練習したいし、日本にいるなら東京だろうと。



高校生活はいかがでしたか。

少し拍子抜けしたというか、私には学校の雰囲気がのほほんと感じられて。地元の教室で一生懸命やって来たけど、このままでいいんだろうかと、ちょっと目標を見失いかけてました。そんなある日、高校から習い始めた先生がカルテットをやっていたので、「君も弦楽四重奏をやってみればいいじゃん」と言われて。そこから友達と組んで、室内楽の楽しさに目覚めちゃいました。高校時代は、年がら年中室内楽ばかりという生活でした。

その先生というのが、東京クワルテット創設メンバーの原田幸一郎さんです。松浦さんが思う室内楽の魅力とは。



一緒に弾いた時に生まれるハーモニーもそうなんですが、今までずっと一人でやってきたので、合わせる
こと自体がすごく楽しくて。初めましての人と組んでも音楽を通して通じ合える。全員の“ピントが合う”瞬間
がすごく快感でした。例えばベートーヴェンもそうですが、作曲家が弦楽四重奏にかかる思いはすごく強く
て、良い作品がたくさんあるんですね。弦楽四重奏でたくさん勉強したことで発見も多く、ソロに戻った時
にすごくプラスのエネルギーを貰えました。

例えば、以前とは曲の解釈が変わったり？

そういうこともあります。いまオーケストラに入って演奏していても、ヴィオラだったらこう弾く、チェロはこう
で管楽器はこうだなとか、全部の音楽がイメージとして自分の中に入ってくる。そうすると曲の世界が広が
るし、ソロでもそういう音表現しようと挑戦するんです。

彼らの音まで再現しようと。

オーケストラのスコアには、たくさんの楽器の音符が並んでいますが、それを全部自分の中で把握できる
ようになったのは、すごくありがたいことでした。ソロでヴァイオリンを弾いている時も、「ここはもしかしたら
ティンパニーのイメージかもしれない」とか、作曲家が求めるものを自分でより深く想像できるようになっ
た。それは今までになかった感覚でした。

クラシックは「答えがないのが魅力」と、過去のインタビューでお話されています。スコアにすべての“答え”が書かれているわけではないのですね。

具体的に「こう弾いて欲しい」と文章で書かれているわけではないので、読み方によって表現の仕方は違います。そこが面白い。例えば「fフォル」「p ピアノ」と書いてますが、それ以外の部分は何もしないわけじゃないので。だったらその音型に従って、どれくらい大きくするのか、小さくするのかを考える。ズボラな作曲家だとそもそもあまり指示が書かれていない。逆にものすごく細かく指示を書いている人もいますね。



譜面にも作曲家の個性が表れるのですね。

その作曲家にとっての「フォルテ」は、どれぐらいをイメージしているのか、とか。いろいろ考え出すとスコアを読み解くのにも結構な時間がかかります。手がかりとして作曲家の伝記を読んで、性格や時代背景から想像したり。今は自筆譜が見れるので、そういう資料も参考にします。面白いですよ。

「楽器の実力に追い付くように練習する。不思議な感覚でした」

日本センチュリー交響楽団には2011年、アシスタント・コンサートミストレスとして入団されました。

コンサートマスターの隣で弾くので、基本はコンサートマスターが楽に仕事ができるよう補佐するのが役目です。最初の一年は必至でした。オーケストラのレパートリーも自分にはなかったですし、勉強が大変でし

た。毎回初めましての曲がたくさんあって、それを稽古や勉強、色んなことと平行してやらないといけない。オーケストラは公演数も多いので、いつも頭からシューツと湯気が出ているような状態でした。



当時の焦燥ぶりが伝わってきます。

最初の1年は大変でした。今日はここでリハーサルして夜は次の公演の曲の勉強、そして翌朝には自分の練習をする。一日中、頭も身体もフル回転！ しかも入団したのがマイコプラズマが流行った年で。平日は気が張っていたんでしょうね、休みになると体調を崩していました。

そんな怒濤の歳月を乗り越えて2015年、現職に就任されました。

コンサートマスターは簡単に言うと、皆が気持ちよく仕事ができるようにするひと。現場の士気が滞ると、「がんばろうよ！」と気持ちを盛り立てる、中間管理職です(笑)。演奏はできて当たり前なので、多分音楽面じゃないところで必要になってくるんじゃないかな。



技量に加え、人間力が必要なんですね。

でも大阪のオケって特殊だと思います。もともと話上手で、突っ込み上手な人が多いじゃないですか。例えば、指揮者の指示が不親切だと「何言ってるか、分からへんねん」と普通に突っ込む声が聞こえます（笑）。そういうのが面白いですね。

コミュニケーションをとる上で、一番大事にされていることは。

決めつけないこと。色んな人と出会う中で、私が「こう思う」と言い切っちゃうと、そこで終わるので。もちろん最初は「もっとこうしたらいいのに」と思うことは、たくさんありました。でもそれも私の決めつけだったの。今はこうしてみたいけど「みんなはどう考えているの？」と聞くようにしています。すると意外に協力的だったり、違う方向から答えが聞けて、「それいいね」と私の考えが変わったりする。それがコミュニケーションの面白さです。

これまでの演奏家人生の中で一番のビッグニュースは？

いまパッと思い浮かぶのは、現在の楽器を貸与して頂けたことですね。2年ぐらい前にお話を頂いて、最初はアマティという別の楽器を勧められました。とても素晴らしかったのですが、あまりピンとこなくて。すると先方が、せっかく音楽家としてやっていくんだから、「あなたに合う楽器を探しましょう」と言って下さいました。



それが今お持ちのフランチェスコ・ルジェッリです。名器とはいえ、相性のようなものがあるんですね。

このヴァイオリンは、裏板もとても綺麗なんです。相性に関しては感覚的なものと、自分がもともと好む音色にもよると思います。例えば一番有名なヴァイオリンのひとつにストラディバリウスがあります。あの楽器は高音がすごく綺麗だと言われているので、逆に低音を魅力的に鳴らしたい場合は、「ストラディバリウスだと物足りない」と言って、違う作者の楽器を探される方もいます。その辺、楽器は奥深いですね。



技量に加え、楽器の個性も演奏に作用するんですね。

もうここまで良い楽器になると、楽器に育てて貰う感覚です。長年使われていなかったなので、当初はあまり音が鳴らなくて。やっぱり楽器は弾いて振動させて、どんどんいい音が鳴ってくるものなので。最初はそこを徐々に開いていって……といっても、なかなか開けてくれなかったんですけど(笑)。でも、もともと楽器自体に引き出しがたくさんあるので、最初はそこに自分の技術が追い付くように練習するような感覚でした。「あ、こうやって弾いたら楽器は嬉しいんだな」というのが、だんだん分かってくる。今までにない不思議な感覚でした。まだ眠っている音の半分も発掘できてないと感じるので、これからどんどん音が乗ってくると思います。

ヴァイオリンは、かけがえのない“相棒”？

いえいえ、師匠です。相棒なんて言ったら怒られちゃう(笑)。本当に最初はピツと撥ね付けられる感じでした。弾くほどに厚い壁が見えてきたので、音を鳴らすこと自体がまず大変でした。昔の楽器って、ホールで聴く分にはすごくいいんですけど、自分の耳元ではあまり聴こえない、遠鳴りっていうんですけど。楽器に合わせて耳を作り替えるのも大変でした。

ホールの後ろから跳ね返ってくる音を聴くわけですね。



そうですね。今までオーケストラでコンサートマスターをやっていても、自分の音の位置ってあんまり聴こえなかった。でもこの楽器になってからは、自分の音が分かるというか、全体の音の上にポンツと乗って聴こ

えてくる。楽器のポテンシャルが違うから、自然とその音に耳が向くというか。みんなにとっても聴き取りやすいんだと思います。

存在感のある音色は、ぜひ演奏会で堪能したいところです。

昨年のベートーヴェンに引き続き、2020 年は七夕に「ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会」を開催します。挑戦を通してまた成長につなげたいですね。他にも、タンゴが好きなので、ピアソラの曲はまた演奏してみたいですし、オーケストラに入ってからはずっと取り組むことが少なかった弦楽四重奏にも今後はしっかり取り組みたい。定期的に演奏会ができればなと思います。

最後にクラシックを広く楽しんでもらうために、お客様にメッセージを。



とにかく敷居が高いというイメージは常々無くしたいと思っています。時々ドレスコードについて言われることもあるみたいですが、個人的にはジーパンやスニーカーでも問題ないと思っています。自然にただ音楽を楽しみに来て貰えれば。先日は、「ドラゴンクエスト」のゲーム音楽の演奏会がありました。「オーケストラってこんなに面白いんだ！」という感想も聞けて嬉しかった。小さいお子さんが、キャラクターの帽子かぶって聴きにきて下さったりして、可愛かったですね。そうやって、身近に楽しんで貰えれば嬉しいなと思います。

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

ご飯がめっちゃくちゃ安くて美味しい。大阪のひとは味に厳しいイメージがありますよね。また、戻って来てから気付いたのは、大阪には正直なひとが多いということ。東京だとグッと飲み込んで笑顔で終わらせるような場面でも、大阪のひとはちゃんと言葉にしてくれる。最初はそこに圧倒されて2、3歩下がるような思いでしたが(笑)、慣れてくるとそっちの方が良くて。結果的に親しくなれるんですよね。お客さんも温かくて、常に「ワー！」っと拍手してくれるイメージです。コンサートはお客さんがいないと成り立たないので、いつもありがたいなと思っています。



【松浦奈々オフィシャルサイト】 <http://nana-vn.com/>

【日本センチュリー交響楽団】 <https://www.century-orchestra.jp/>